理から外れた天使

安藤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
理から外れた天使

【Ｎコード】
Ｎ３４０６Ｖ

【作者名】
安藤

【あらすじ】
これは、とある転生者の物語。
自殺願望のある少女は、神の所為でネギまの世界へ。
死にたいと思う少女には、死ねない何かがあった。

（前書き）

またも何やらアイデアが……誰か書いてくれないかなぁ―（ω・、）

チラッ

私は、所謂転生者と言う奴だ。

自殺をした筈なのに、神様に間違って殺してしまったとか言われ、そのまま転生しろと言われた。

別にもう生きる気も無かった。転生なんてする気が無かった。

でも、生きて貰わないと困るらしい。何故かは知らないけど。

だから、記憶を消し、最低限の知識を持って、ネギまとやらの世界に転生した。

其処からは、普通に生きていたつもりだった。

でも、間違いだと気付かされた。

幼少期、保育園で倒れた時、私の体には傷一つなかった。それならまだいい。

銀行強盗に人質に取られ、銃を胸に打たれた筈だった。でも、傷一つなかった。

私にしか分からないが、体の表面を何かが覆っているのだ。ソレの所為で、私は自分で自分を傷つける事も、他人が自分を傷つける事も、事故が自分を傷つける事も無かった。

交通事故にあって、確実に死んだと思われたのに、火の中から無傷で現れるなんて、恐怖以外の何物でも無い。

そんな事が多くあった。

だから、私が親に捨てられたのも偶然では無く、必然なんだろう。

小さいときからの友達は全員気味悪がった。そして、孤児になって、麻帆良へ連れてこられた。

ここは異常だった。異常が普通で、普通が異常で、そんな場所だ。

中学に上がっても、私の異常性は変わらなかった。

友達なんて作る気は無かった。どうせ直ぐみんな気味悪がるから。

他人は勝手に離れて行くし、自殺しようとしてもナニカに阻まれる。

私に何をして欲しいんだろう。こんな世界で、私を苦しめたいだけなんだろうか？

転生すれば幸せになれるなんて思わないで欲しい。望まない事なんてしないで欲しい。神様なら、その辺は弁えている筈だと思う。

「……下らない」

「何がだ？」

目の前にいる褐色少女、龍宮は私の呟きに返す。

彼女は何やら危ない仕事でもしているらしい。私は興味が無いのに、「いつも何しているんだろう」とか思うと、いつの間にかそんな情報が頭の中に入ってる。

人権なんてあったもんじゃない。

まぁ、そんなのは今更だけど。

麻帆良では法律なんて意味を成さない。目の前の少年がいい例だ。

ネギ・スプリングフィールド。十才で教師なんて馬鹿げてる。

飛び級にしたって、性格が駄目だ。ひいきが凄いもの。

「世界に絶望してるだけよ」

「……また小難しい事を考えているのか」

「小難しくなんて無いわ。唯生きるのが凄く面倒になっただけよ」

餓死とか病死でもしたいところだが、生憎と欲求には逆らえないし、何をしたって風邪ひとつひかない頑丈な体だ。

外的要因では傷一つつかず、内的要因は発生しない。ふざけた体だ。どうなってるのか、解剖でもしてみたい。

「では、赤羽さん。この答えは何でしょうか？」

赤羽零（あかばれい）。それが私のこの世界での名前だ。

見た目は男にも女にも見える金髪の長身。女だけどね。

問いはネギ先生の双子の兄とやらのリア・スプリングフィールド。何でもこの人も転生者らしい。

能力は超能力全部とか黒翼とかって言ってた。間違えた、言ってたじゃ無くて、情報が勝手に手に入った。

彼なら私を殺してくれるかも知れない。そんな淡い希望を抱く。この力の正体が分かるだけでもいいから、何か手伝って欲しい。

寮に帰り、一人部屋で適当に過ごす。

今日は確か停電の日だ。蝋燭何かを用意しておかなきゃ。

そんな事を思っていたが、見つからない為コンビニへ買いに行く事にした。怒られても別に構わないし。

人より精神はタフだ。

夜道を一人で歩く。

誰もいない道。停電は既に始まっているらしい。急いで帰ろうと歩を早める。

だけど、ソレを許してくれなかった。

轟音と共に誰かが空から降って来た。いつも通り、私は避けもしない。

その人は勝手に私に当たって、衝撃さえ通らずに地面に落ちた。

金髪で、ワンピースの様な服を来た少女。確か、エヴァンジェリン。

この子も確か「魔法関係者」らしい。例によって勝手に手に入った。

「……ご、はぁっ……貴様、赤羽、か？」

「そうだけど、どうしたの？　エヴァンジェリンさん」

「何故、この時間に、ここにいる。寮からは、出てはならん筈だろう」

喋るのもきつそうに言う。よく見れば、胸には穴が空いている。

誰かに殺されかけているのだろうか？

羨ましい、死ねるなんて、羨ましい。そんな言葉が頭の中で反復する。

「ハッハァ！　どォしたよ。『闇の福音（ダークエヴァンジェリン）』！！　もォおしまいかァ！？」

高速で飛来し、降り立ったのはリア先生。

獰猛な肉食獣よろしく、ギラギラと睨みを効かせている。

「クソッ、どうなっている。何故魔法が通じない！」

「俺には『ベクトル操作』っつぅ能力があンだよ。魔法なんて効きやしねェ」

ゆっくりと歩いてくるリア先生。私はエヴァンジェリンさんの前に立つ。

「あン？　何？　オマエ。まさかその犯罪者を庇ってるつもりかァ？」

「……そうね。庇ってるのかも知れない」

「ハァ？」

「先に私を殺してくれないかしら？　自分では死ねないのよ」

ニッコリ、笑顔で言う。漸く死ねる、そう思った。

「ハッ、だったらお望み通りぶち殺してやるよ！」

高速で私を殺そうとする先生を見て、漸く死ねると思った。

ゆっくり目をつぶり、次の感覚に備える。きっと来るであろう痛みに。

予想に反して、次に来たのは音だった。

目を開けてみれば、肩から斜めにバッサリ切られ、血に濡れているリア先生の姿。

「お前……何だ、その……翼は……」

後ろから、驚きの声が聞こえてきた。

それに沿うように後ろを向けば、『輝き過ぎるほど輝く翼』が私の背にあった。

単純な金色とも違う。白色の芯を持つ、青ざめた輝きのプラチナ。

コレを見た瞬間。私は理解した。この力の正体を。

「『エイワス』」

それが、この力の元の持ち主。

かつてアレイスター＝クロウリーに必要な知識を必要な分だけ授けた者。

リア先生は血液を操作し、宇宙空間でジュースを零した様に血管を通らず血が流れる。

おかげで、血は零れていない。

「クッソ、がァ。『エイワス』だと、そんな理不尽な力が、何故使える……」

あなたの言えた事じゃ無い。超能力だって、相当理不尽な力だ。

何かを感じる訳でもなく、唯其処に立ち尽くす。

彼でも、私を殺せないのか。

失望感が体を巡る。

もう、この人に興味は無い。そう思って、立ち去ろうとした。

「待ち、やがれ」

轟音と共に現れた真っ黒な翼。

私の背に、未だ現れている翼とは対になる様な黒翼。

「ブチ、殺す……」

百メートル近くまで伸びているその翼を無慈悲なまでに振るう。まともな人間なら、この一撃で肉塊になるだろう。

でも、私は違った。

私の翼と彼の翼が交差する。

黒翼は一撃目で根元から千切れかけ、二撃目で完全に分断される。

勝敗なんて、初めから決まっていた。

彼の体を貫き、私の翼は消えた。恐らく、もう危険は無いと判断したのだろう。判断したのは、恐らく私では無いけど。

もう直ぐにでも絶命するであろう彼を放って、私は寮へと帰る。

この力の正体が分かっただけでも、儲けものだ。

「あなたなら、私を殺してくれる？」

少女は、白髪の少年と対峙する。

「……全く、どうなっているんだか。石化も槍も、果ては『冥府の石柱』も『引き裂く大地』ですら傷一つ与えられないなんて。悪い夢でも見てる気分だよ」

輝き過ぎるほど輝く翼は、少年の障壁をまるで何も無かったかのように引き裂いた。

「へぇ、コレがスクナっていうんだぁ」

見上げれば、ビル数階はある巨大な何か。

その近くには、白い羽を生やした桜咲の姿があった。

「ふぅん、白い翼かぁ。彼は真っ黒だったし。私はなんて表現したらいいか分かんないけど。綺麗だねー」

「赤羽、さん……あなたのその翼は……一体……」

「あ、コレ？　忌子とかの証じゃないよ。私の生まれつき持ってた力の象徴みたいなものだし」

「力の、象徴？」

「そう、象徴。それにしてもすごいね、この神様。……神様なら、私を殺せるかなぁ」

まるで子供がおもちゃを欲しがるように、自然と口から言葉が漏れる。

純粋なまでのその願望に、その場にいた全員が冷や汗をかく。

「な、何やアイツ……やってしまい、スクナ！」

その巨大な腕を振り上げ、少女を潰そうと向かう。

だが、その攻撃は届かない。

「あ～、やっぱり駄目か。神様でも殺せないって、一体どうなってるんだろ」

数十メートルまで伸びた翼は、いとも簡単にスクナの体を引き裂いた。

「……退魔の神鳴流なら、殺してくれるかな？」

無駄だと分かっていても、試さずには居られなかった。

「この計画での最大のイレギュラーはあなたヨ。赤羽さん」

「そう、下らないわね。私を殺せたら、計画を実行させてあげるわよ」

そう言う少女を相手に、超は動く。

手に持った時間跳躍の弾丸は弾かれ、時間を跳躍した筈の彼女は変わらず其処に居る。

「一体、あなたは何なんダ……」

少女の問いには、答えない。

「あなたが創造主（ライフメイカー）？　ふうん、確かに強そうね」

まるで友達とでも話すかのような口調で、少女は其処に降り立つ。

「なんだ貴様は！」

「あなたは……二番目（セカンドウム）っていうんだね。強そうだけど、性格が凄く残念」

「何だと！？　喰らえ！」

千の雷×3！！

そう叫び、創造主の使徒達は雷系最大古代語呪文を放つ。

しかし、少女は無傷だった。

「……何だ、やっぱりこんなものか。期待して損したかな？」

予想通りとでも言いたげに、少女はため息をつく。

輝き過ぎるほど輝く翼は、魔法など物ともせずに存在している。

「『終わりなく白き九天』」

氷の竜巻が巻き起こり、冷凍雷撃は創造主の使徒を凍りつかせる。

それにわざと巻き込まれても、彼女は凍らなかった。

「……トンデモねぇな。あの嬢ちゃん」

「……生粋のバグキャラの貴様が言うか。確かに、初めて見たときから奴は変わらず最強だよ。私達では、何年かかろうと倒せん」

ゆっくりと、創造主へと歩を進め、目の前まで来る。

「創造主（ライフメイカー）。この世界を『完全なる世界』にしたいのなら、私を殺しなさい。でなければ、この術式は発動させない」

「……お前は、一体何者だ？」

何者か、そう問われ、少女は考える。

数秒考えた後、思いついた様に言う。

「そうね、簡単に言うなら『天使』って奴よ。もしくは『ドラゴン』って言った方が近いかしら」

無邪気に笑うその顔は、世界を絶望に導くものだった。

「さぁ、世界はあなたの手に委ねられるわよ。私を殺せればあなたの勝ちで私の勝ち。私を殺せないならあなたの負けで私の負け」

「……どういう事だ？」

「私は、死にたいのよ。でも、この翼が邪魔して死ねない。……あなたなら、私を殺せる？」

二人は、激突する――――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3406v/

理から外れた天使

2011年9月16日13時18分発行